

26. 左側硬口蓋部に発生した脂肪腫の1例

川上 譲治¹⁾, 道谷 弘之¹⁾, 大友 靖臣¹⁾
 前田 淳¹⁾, 富岡 敬子¹⁾, 江上 史倫¹⁾
 西村 学子²⁾, 大内 知之²⁾, 賀来 亨²⁾
 武藤 壽孝, 金澤 正昭
 (口腔外科学第一¹⁾, 口腔病理²⁾)

脂肪腫は全身の皮下, 特に頭頸部領域の皮下によくみられる非上皮性良性腫瘍で, 口腔領域でも時折みられるが, 口蓋に発生した脂肪腫の報告は比較的少ない。

今回, われわれは硬口蓋部に発生した脂肪腫の1例を経験したので若干の考察を加えてその概要を報告した。

患者は71歳の女性で左側硬口蓋部の腫脹を主訴に来院した。現病歴として初診約10カ月前に左側硬口蓋部の軟らかい腫瘤に気づいたが, 特に症状がないため放置していた。その後, 腫瘤が徐々に増大してきたため, 当科を受診した。初診時, 左側硬口蓋後方に $17 \times 14 \times 5$ mmの表面粘膜はやや黄色を帯びた半球形の弾性軟の腫瘤を認め, 偽波動を触知した。CT所見では左側の腫瘤と一致する部位に類円形のlow density areaを認めた。以上の所見より, 左側硬口蓋部脂肪腫を疑い, 腫瘍摘術を施行し

た。摘出物は, 被膜に覆われ, 柔軟で, 黄色を呈し, 断面は, 充実性黄色を呈し, 細い赤色の線維で分葉状に区画されていた。病理組織像では, 薄い線維性の被膜に包まれ, 内部は分葉状に区画された脂肪組織から成っていたため, われわれの症例は単純性脂肪腫と診断された。現在, 術後3カ月で再発の徴候もなく経過は良好である。

口蓋部に発生した脂肪腫の本邦での報告は, われわれが渉猟し得た文献の範囲では, 自験例を含めわずか18例に過ぎなかった。この18例の性差別発現比率は2対1の割合で女性に多く, 組織型別分類では, 線維脂肪腫が多い傾向が見られたが, 前述の如く, われわれの症例は単純性脂肪腫であった。

27. ビリルビン着色歯萌出モデルLECラットの着色機序の検索——実験的黄疸による検討

牧 富弥代, 柴田 敏之, 渡辺 一史
 小田 浩範, 大森 一幸, 有末 真
 (口腔外科学第二)

【目的】LEC (Long Evans Cinnamon) ラットは生後4ヵ月齢で約90%に高度の黄疸を伴う急性肝炎を遺伝的に発症し, その後, 肝硬変, 肝癌へと推移する肝疾患モデル動物として注目されている。これまでわれわれは, このLECに高度の黄疸を伴う肝炎を克服後, 2~3週経過した時点でビリルビンの沈着による緑色を呈する着色切歯が萌出する現象を観察し, ビリルビン着色歯萌出モデル動物として, LECが有用であることを報告してきた。そこで, 今回, LECにおける着色機序を明らかにするために, LECと同一のclosed colonyより得られた4ヵ月齢のLEA (Long Evans Agouti) ラットに, 胆管結紮とビリルビン投与を行い血清ビリルビン値と着色歯との関係, さらに, 着色歯の形態的变化をLEC着色歯と比較し, 検討したので報告した。

【方法・結果】LEA胆管結紮により, 血清ビリルビン値は, ピーク時平均 8.9 ± 1 mg/dlを示したが, 着色歯は0/

9匹 (0.0%) であった。胆管結紮に加え, ビリルビン投与 (14mg/kg/day, 4日間) を行ったところ, 血清ビリルビン値は, ピーク時平均 13.7 ± 1.4 mg/dlを示し, 着色歯は5/10匹 (50%) に認められた。しかし, 着色群, 非着色群間の血清ビリルビン値に有意差は認められなかった。LEA着色歯の病理組織学的所見では, LEC着色歯同様エナメル質に異常は認められず, 着色は, 象牙質内に成長線に沿って認められた。また, LECラット着色歯で認められた象牙細管の走行異常と着色との間に関連性は認められなかった。しかし, LEC着色歯で認められたマイクロラジオグラフィー透過像は, 着色歯全例 (5/5匹) に着色部に一致し認められ, 非着色歯では全例 (5/5匹) 認められなかった。

【考察】以上の結果は, LECビリルビン着色歯形成において, 高ビリルビン血症を呈する以外に, 歯質の石灰化不全を合併することが重要な要素である可能性を示唆した。